



日本文学全集
53

阿川弘之・曾野綾子
北杜夫



雲の墓標・年年歳歳・夜の波音
たまゆら・遠来の客たち・海の御墓・他
夜と霧の隅で・岩尾根にて 羽蟻のいる丘・他

河出書房



目次

阿川弘之

雲の墓標 七

年年歳歳 九

夜の波音 100

曾野綾子

たまゆら 115

遠来の客たち 118

海の御墓	101
夜間標識	114
北 杜夫	
夜と霧の隅で	117
岩尾根にて	127
羽蟻のいる丘	128
谿間にて	129
死	130
白 毛	133

注 釈

年 譜

解 説

巻頭写真

色刷挿画

紅野敏郎 三三

鶴羽伸子 三四

進藤純孝 三五

榎本良介

斑目秀雄

小松崎邦雄

山川輝夫

雲の墓標
夜の波音

たまゆら

夜と霧の隅で

阿
川
弘
之

雲の墓標

大竹海兵団*

昭和十八年十二月十二日

今日は入団後はじめての日曜日、日課は身の廻り整理。わずかに晏如の心を得て日記をつけはじめ。

一昨日午前十一時五十分大竹駅下車、海兵団に到着して、午後身体検査。合格。「B」。飛行適を申しわたされ、自分の進むべき道はすでに定まった。学生服を脱いで、ジョンピラと称する水兵服を著、かぶりにくい水兵帽を頭にいただき、純白の作業衣も支給された。夜ははじめてハンモックを吊ることを教えられ、衣服をたんで枕にすることをおぼえ、また初めて海軍の夕食を食べた。軍隊で寝た最初の夜だけは寒かった。

四日まへの晩、大勢の肉親知友に送られて、ごったがえす大阪駅頭をたつて来たことは、すでに半年も一年も、あるいは三年もまへのことのように、双眼鏡を逆のぞいたように、はるかに遠く感ぜられてならない。海軍の生活が地獄であるか極楽であるかは、未だ自分にはわからないが、分隊長から「娑婆」という言葉を聞かされた時には、自分がいま、住み馴れた自分の天地から、はつきり疎隔した別の世界に移って来たことを、強く感じさせられた。もとよりそれは覚悟のまゝであるが、自分の心は、積極的にすべてに打ち向って行こうとして四肢にみなぎる勇気をおぼえて猛烈にふくれ上るかと思うと、又、奈落へ突きおとされるような淋しさと焦躁とで、風船のように萎んでし

まう。のこして来た学業への未練、父母への思慕、多くのなつかしい人々への気持、それが十重二十重に自分からみつき、自分を幾つにも引き裂くのである。しかし、自分たちにはもはや、なにかを選ぶとすることは出来ない。定められた運命の下に、自分を鍛えることだけが、われわれに残された道だ。

海軍では、バケツがチン・ケースで、雑巾が内舷マツチで、盥洗はオシタツプで、風呂はバスで、僕、君、ネ、殿、厳禁。あやまって口に出せば、教班長から半殺しという額をこづく刑罰を一つずつもらう。如何なる些細なことも、此のあたらしい社会の言葉と秩序としたがつて、自分を習熟させ成長させてゆかねばならぬ。

ただ、此の海兵団ではわれわれ学徒出身兵は、それぞれ出身学校別に分隊が分けられていて、早稲田の分隊、東大の分隊、中央大学の分隊、広島高師の分隊、そして自分ら京都大学の分隊という風で、今もこうして日記を書きながら周囲を見ると、藤倉は浮かぬ顔をして仁丹を噛んでいる、坂井は葉書を書いている、鹿島もどこかにいる筈で、これは自分の倅せである。

十一月の末、最後の万葉集演習がおわって、夕ぐれまでグラウンドでベースボールをしたあと、みんなで図書館裏の大きな櫛の木の下に坐ってしゃべりあった時、鹿島が詠んだ、「真幸くて逢はむ日あれや荒櫃の下に別れし君にも君にも」という歌を、自分は好きで心にとどめているが、其の仲間が半数までここにこうやって共にくらししていることは、自分を非常に勇気づけてくれる。

戦局は日本に有利な状況ではない。しかし米國にとっても必ずしも有利な状況ではあるまい。アメリカの学生たちも、あるいはシェークスピアやホイットマンの研究をなげうって、戦列に伍して来ているであろう。これからの戦いは、ある意味で彼らとわれわれとの戦いであるかもしれない。あらゆる妄念を心の底に沈めて、雄々しく戦うことに努めねばならない。明月曜日には正式の入団式で、呉鎮守府司令長官の巡視がある。自分たちの小さな心の動きをすべて圧伏する巨大な車

輪の廻転によつて、一歩々々大きな組織の中へ溶けこんでゆくのだ。

十二月十五日

午前中、分隊長湯原大尉の精神講話の時間に、藤倉が新聞を読んでいてみつかった。分隊長の話は、海軍の精神としてスマートネスということを説いたものであった。これは洒落気のことではない。敏速にやわらかく、軽く、しかし粗暴にならぬように、静かに。身のこなしにも頭の廻転にも、これなくては、船乗り飛行機乗りとして海軍のお役にはたたないという話の途中で、大喝一声、

「誰だ！ うつむいて新聞を読んでいるのは、起て！」と。一同どうなることかと心安らかでなかったが、何の新聞だとたずねられて、藤倉が読書新聞だというと、分隊長はよくわからなかったらしく、訊きかえた。藤倉はやや反抗の語気で、

「読書新聞の芭蕉のことを書いたものを読んでおりました。これを書かれたのは、わたくしの恩師であります。分隊長の今話されておることとは、芭蕉の申す軽みという心に通じるものであると思います。」と叫ぶように答える。

「新聞を見ながら、わたしの話がわかったか？」

「ハイ。聞いておりました。」

一同失笑。分隊長は笑わなかったが、

「よし。新聞のため。以後そういうこと相ならん。」といい、とがめはそれだけで話を切つた。あの芭蕉の話はO先生が書かれたものだ。自分ではなつかしい気がした。しかし湯原大尉に対しても、悪い感じは起らなかつた。

午後、予備学生試験。国語、作文、数学、物理。監督は教班長吉見善太一等兵曹。われわれは此の試験に合格して、当海兵团での教程を了えると、一カ月余のちには、士官の服を著、少尉候補生に準ずる階級をあたえられて、各々の専門の技術の修得を始めることになる。

自分は十中八九、土浦航空隊に行くことになる。吉見一曹はミッドウェイ海戦で沈没した航空母艦蒼龍乗組の生きのこりで、海軍生活はすでに十年になるが、われわれは間もなくその上級者となって、戦場で相見える日があれば、掌中に此の人たちの生死をにぎって、其の指揮をとらねばならぬのだ。これを安易に考えるわけにはゆかない。海軍のことを未だ右も左も知らぬ者が、いくらもせぬうちに自分の上官に成りあがると思うことは、教班長たちにとって愉快なことではないであろうと察しているが、すくなくともうちの吉見教員は「大学の先生になった。」といつて笑ひ、かつ自分の責任を重いものと感じていられるらしく、われわれに対して無理難題をいかけけるようなことは全くない。

試験は、国語、作文はなんでもなるが、数学と物理は、われわれ文科系出身者にとっては如何にも苦手である。オームの法則とか、ヘルムホルツのエネルギー不変の原理とかいうものは、中学生時代に聞いたことのあるようなかすかな記憶として残っているだけで、みんな頭をなやましていた。ところが、予備学生試験に際しても、海軍の慣例で、各分隊各班の競争意識は非常につよく、教班長としては、まぢがっても自分の班から不合格者を出すような不名誉はとりたくない。それで監督自身がカンニングをしてあるいている。吉見教員が自分の机の横に立ちどまって、鉛筆でチョンチョンと叩くので、振りかえるとも、知らん顔をして行つてしまった。よく見てみると、自分の数学の例題は一つ答がちがっていた。あちらでもこちらでも立ちどまつて、チョンチョンと叩いて歩いて歩いている。

夕別科海軍体操。

十二月二十八日

カッター操漕三回目。約五十回。はた目に整々と美しく、みずからやつてこんな苦しいものはあるまい。しかし頑張らねばならぬ。

鉄石の意志。清潔整頓。積極進取。実務第一。

だが、正直に書けば、これらの徳目とくもくにびたりと寄りそつて、ちよつど其の反対のものが常に自分の心に顔をのぞかせている。弱気。怠惰。消極現状維持。要領第一。自分は要領第一になれる方ではないが、時に要領よくやらねば、軍隊のなかりは生きてゆけないのではないかと感ずることがある。藤倉は煙草盆の時間に、自分に向つて公然と、「要領だよ、吉野、要領だよ。君は馬鹿正直の方だからいってや、自分が、僕たちは海軍という閉ざされた世界の鑄型にはまらなくても、自分たちのやるべきことだけはやれるよ。それだけの自主性が持てないようなら、なんのために今まで、高等学校や大学で、あんな奔放な生活をして来たのだ？ 鑄型にはまった恰好をしてみせなければ怒るから、そこで必要なのが要領だよ。芥川龍之介は、嘘でしか語れない真実もあるといった。」と。彼は監督者のいないところでは、今もけつして貴様、俺、お前という風な言葉を使おうとしない。そしてわずかな抵抗をたのしんでいるように見える。自分は必ずしも藤倉の意見に賛同はしないが、鹿島や藤倉のいうことだと、どのようなことでも一応は率直に聞くことが出来る。われわれ四人の間では、藤倉と鹿島の二人が一番海軍の気分に対して反逆的で、坂井が最も素直だが、気が弱くやや愚痴が多く、自分は其の間ということである。

ここでは玄米食励行で、毎食前高声令達器が、「食事、食事。総員手ヲ洗エ。ヨク嚙ンデユツクリ食ベヨ。ヨク嚙ンデユツクリ食ベヨ。」と放送している。軍隊に入つたら飯を早く食わないとひどい目にあうそうだと聞いて、みんなでたわむれに小川亭で早飯食いの競争をしたこともあったが、逆であった。そのせいか学徒水兵たちは、みな体質がかわつたように大便によく行く。自分も決して一日三遍、固い糞を沢山して来る。みじかい休み時間、便所はいつも満員で、行列のあとにつくのがおくれたらやりそこなう。大便を我慢して陸戦教練をやるのはつらいものだ。特に不動の姿勢の時、下腹が張つて来て、尻が出そうでつらい。夜なかに一度起きて、一回ぶん

だけウンコをしておくこと。これも要領の一つか。

昭和十九年一月二日

あたらしい年。最初の岩国行軍。入団後はじめて外界の空気にふれ、鶏の鳴きごえや、子供が暗れ姿で羽根をつけているのや、自転車を持つたほろ酔いの行商人が道端で立小便をしている巷の正月風景が、すてに耳にしみるように感ぜられた。岩国川は底に白いまるが、たくさん見える清冽なながれて、錦帯橋の附近は、洛西嵐山の渡月橋あたりの風景によく似ていつなつかしかった。夕刻帰隊。

甘いものが食いたい。ほたもちへの渴求はすでに二週間におよぶ。海軍に入つて来て、自分は毎日何をいばん思っているか。気がつくとき、常に食いのことばかり考えているようだ。自分は女の身体を識らないためか、性欲はまったく感じないが、しかし、赤い炭火でこんがり焼いた豆大福が食べたい。小川亭のトンカツがもう一度食べたい。

正月三日日は銀めしである。毎日の玄米食を見馴れた眼に、つづぶととした艶と適度のしめりをもって白く光っている炊きたての白米は、とうとうと思われる。元日は尿食十時。サラダ、かまぼこ、数の子、黒豆、牛肉、水羊羹、つづいてすぐ、菓子二た袋、林檎一、蜜柑四つが出た。ただしこれだけをその場で一ツ気に食ひ、のこして他の時間に食つてはならないといわたされる。何故だろう？ しかし、事ごとに何故か、というような疑問を持つのは、軍人精神がはいっていない証拠であるといわれる。抗弁するものはないが、懐疑の精神が近代科学の生みの親であると、われわれは聞いて来た。そして海軍はなによりも、西欧の近代科学の上に立脚している。陸軍とちがって、海軍の軍人は、精神主義ばかりでは艦船も航空機も動かないことをよく知っている筈だ。これは矛盾ではないか。

しかし、心底から欲するところ、おのずから多少の道が通ずるもの

のようで、ゆうべ釣床の中へ乾柿三個秘密配給があった。本日おなじく、味噌煎餅五枚秘密配給。煎餅を音をさせずに食うのは、至高の技術を要する。世界が二つに割れてこうして戦争をしても、必要となれば、スエーデンの鉄鋼でも米国の機械でも輸入する道はのこつていないというが、自分たちの方でも、外界との道は完全に絶えているわけではない。同班のSは、大竹町の顔役の息子で、海兵団の副長を通じて物資がはいる由で、味噌煎餅はSの恵手である。となりの班にいる鹿島は、大晦日の夕方、突如高いところより、

「こら。鹿島、鹿島。」と天狗のごとき声あり、驚いているうちに、からだを掃除道具入れの棚の上にひっぱり上げられて、石井教班長より、さあ食えといって、乾柿と如玉子を二十くらい呑みこまされたという。鹿島の父君が鹿島の正月を憶つて食べものをたくさん持つて面会に来たが、あわせてもらえず、

「それでは捨てるのも勿体ないから、どうか教班長さんたちであがつて下さい。」と色々なものを置いてかえつたのだそう。ひそかに面会をもとめて来て、あえずにかえつて父兄は相当多いらしく、それらのなかには、教班長を買取しようとする者もあるらしい。また買収される教班長も多くの中にはいるらしい。自分はどういうことは好きとはいえないが、食ひ気のまには精神が妥協的になる。ゆうべの乾柿の秘密配給は、むしろ鹿島からのものである。

大晦日にはまた、温習時に、ノートに丹念に親子井とカレーライスと洋菓子の絵を描いていた奴がつかまつた。六教班のMである。十二色の色鉛筆で実に克明に描いてあったが、ビリビリにやぶられて、分隊長から両頬往復二つなぐられた。自分はさいわい、入団以来未だ一度もなぐられたことがない。

一月七日

昨夜、底びえのする寒さであったが、今朝は雪。中国の山と瀬戸内

海の鳥々を白くいろどつて雪はなほ霏々として降っている。天突き体操。かけあし。おわつてカッター。と叱つていたが、それは乗艇のとき、分隊長のいるままだけで、沖へ出ると、「櫂組め。」を掛けて、雑談をしてくれる。われわれは雛のようにたがいにからだをくつつけて煖をとる、手をこすりながら教班長の話を聞く。いつも青黒く見える大きな腋島が薄く化粧をして、雪の降る海の中に横たわっている。カッターの中にも薄く雪がつもっている。港にはドイツの潜水艦が二隻入っているのが見える。

吉見教班長の乗艦蒼龍沈没の時の話を聞く。ミッドウェイのたたいは、あきらかに日本側の負けいくさであった。此のミッドウェイ海戦をやまとして、日本の空母はすでに、赤城、加賀、龍驤、蒼龍、飛龍、祥鳳、みな無く、さいきん特空母沖鷹も沈んだそうである。沖鷹は日本郵船の新田丸の改装であつた由。正規の航空母艦として現存しているものは、わずかに翔鶴、瑞鶴の二隻のみで、これからの戦争は日本にとって、よほどの難事となるであろう。かならずしも大本営発表のラジオの報道のような景気の良いものではあるまい、実戦に出た者がそれは一番よく知っている、みんなも自分のいのちは、およそ来年の春ごろまでのものと覚悟して、よく気持をさだめておく必要があるとういわれ、それがしみじみとした調子で、一同手をこするのも忘れてシンとして聞き入る。教班長はまた、みんなが間もなく一人前の士官となって実戦部隊に出てゆくと、自分の責任感から、まじめで熱心な人ほど、部下をしっかりと締めてゆこうという気持をもつようになる。しかし事からの中には、締めても締めなくても、大局にまったく影響のないようなこともたくさんあるもので、必要ないところはよく締めても突きはなしてもなぐつても構わないが、必要ないところをいふことも心得てくれ、なんにも恵まれない若い兵隊にとつてそれがどんなに嬉しいか、みんなが此のわずかな期間の、自分の二等水兵の

時の氣持を忘れないでやってくれと。

あとで同班に、あんなことをいうのは、教班長の下士官根性、来年の春まで死ぬなどといって、自分の将来のこともしつかり計算して、と批判する者あり。自分は賛成せず、ずで見越した自分の階級を笠に著て、そういうことをいうのはおこがましい。無用の自負をもつて、謙遜の氣持をうしなえば、きつといつか、無用のトラブルが起るであらう。

つめたくて指がしびれるが、カッターの漕ぎ工合もよほど会得出来て来た。そのほか、発光信号、手旗、結索。結索は、一ツ結び、二ツ結び、舫イ結び。腰掛ケ結び。一重ツナギ、垣結び、引ツナ結びなどなかなかむずかしい。厠の掃除、洗濯、靴下の上手な洗い方。段々海軍の生活も身についてくるようである。われわれの退団は、今月二十五日よりおそくはなるまいとのこと。

夕食に、あついで豆腐汁と、鯛の尻頭つきが出た。よくのつたあぶらに塩気がしみわたって、うまい。食事当番にて、鯛を一尾、自分の盛り飯の中へかくしこむ奴あり。いくらかくしても、食っているうちに魚の形が出てくるのだが、平然として食っている。これが京大で法律を勉強して来た人間のすることか。自分は彼の所業をさげすみ、且つ憎む。しかし同時に、自分の心はあきらかに其の一尾の鯛を非常に羨ましがっている。どうしてこんなに腹が空くのだろう。

来る十四日に面会がゆるされるのが急に決定し、今日謄写版刷りの案内状を出した。土屋文明「万葉紀行」、萩原朔太郎全集、マツチ、メンソレータム、腹痛の薬たのむ。夜、餠餅一個秘密配給。ハンモックの中で餠餅を食いながら、父母にあえることをおもう、幸福を感じる。

一月十日

京大のO先生、F先生、高等学校のN先生*などから、かたまつて便

りが来た。休憩時間、鹿島、坂井、藤倉等と煙草盆をかこみ、それぞれもらった葉書を持ちよつて、久しぶりに万葉のはなし、大和の風物のはなしに花をさかせた。しかし自分は其のとき、他分隊の者のふとした表情から、われわれにとつて日常茶飯のものであつた万葉集についての会話が、他の人たちに妙に術学的にきこえぬよう注意する必要を感じた。学徒出身の水兵ばかりのなかで、なおしかり。今後実戦部隊に配属されるようになって、本職の軍人や下士官兵にまじつて、いたずらな学問への郷愁をかたることは、つとめて避けなくてはならない。世界に平和な日がおとすれるまで、自分のいのちが承らえることをゆるされた時の用意に、それはひそかに自分らだけで心の底にたくわえておくべきものだ。

しかし、そうはいつても、話はやはりたのしかった。大和三山や二上山や山辺の道や布留川のながれや、昨年の冬、万葉旅行でみんな歩いた土地のことをいいあうだけでも、自分の心は此の上もなくなくさめられた。名張の町の旅宿で掘炬燵にあつて、カルタであそんでいると、裏の山から鴨がよく、グミの赤い実をねらいにおりて来た。自分はまた、機会を得て、二月堂のお水取りに内陣で夜をあかした時のことも思い出される。「水取りやこもりの僧の杵の音」此の寒があけると、また奈良のお水取りがはじまるわけだ。薄水を踏み割ると、泥水がやぶれた靴のなかへじとじと浸みこんで来たその感触までが、ありありと感ぜられる。大和の風物、そして万葉集は、なんといいつてもわれわれが生涯をかけた心の拠りどころであつた。が、今となつては、それらもはや単なる美しい情調、なつかしい憶い出と化したことを忘れてはならない。今はただそれをなつかしんでいる時ではなく、大伴旅人が大宰府で「沫雪のほどろほどろに降りしけば」と歌つた、其の僻遠の地での境涯をたたかいた中でこれからじかにたどるのである。一応学問もすべて捨て去つて、海軍軍人としての自分に徹し切る。そのことが、もしいのちあつた場合、自分が万葉の歌を見る眼をかならず深くしてくれる。それを信じることだ。

N先生からの便りでは、N先生は二月九日まで、東京都北多摩郡小金井町の教学錬成所にはいつ、「みそぎ」その他の錬成に参加する由。しかしこういうことは如何にかんがえらるべきか。各高校から教授が一名ずつ参加しているそうだが、これははたして新しい時代の息吹きを感じさせるようなことか、たしかに必要なことか、あるいは時代に逆行する無用の愚行であるか。自分の気持としては、学園にのこった先生たちや学友が、本業をなげうって「みそぎ」にうつつを抜かしたりするより、自分たちの分までそのつもりになって、平静に従来通りの研究をつづけてもらうことの方が望ましいような気がする。大学の研究室も燈の消えたように淋しくなつた。伏見の輜重隊、奈良の高畑の聯隊、鹿児島、東京、満洲などの各地から、陸軍にはいった者の便りがぼつぼつ教室にとどいて来ているそうである。

一月十二日

自分の心配していたようなことが、やはり起つた。二二七分隊の○
○大学出身の連中のなかに、善行章四本の、海軍の主のような教班長に對し、「任官したら面倒みて上げるから、お互いに適当なところでやりましょうや云々」と軽率な言をなした者があつて、二二七分隊は今夕、総員木の椅子に足をかけたまま、半分逆立ちのような姿勢で前へ支え（腕立て伏せ）をやらされ、急降下爆撃といつて、いきおいつけて尻をどやしつけられ、オンタツプの水を思いきりかけられて、みんな尼腰立たなくなつたという。腕のちからが萎えてしまつて、支えきれなくなつた者は、みな甲板にながれた水を舐めさせられたそうである。其の修正のはげしさを聞いて、自分は胸をおさえつけられるような苦しみを感した。しかしこんなことでむやみに恐怖してはならぬ。陸軍などでは、もっとひどい理不尽な刑罰が常識のようにして行われているといふことだ。自分を甘やかしたり、思いあがつたりせず、軍隊の眞実に正面から取り組んでゆかねばならない。他分隊のこ

とではあるが、あたらしい一つの経験として、身につけてゆかねばならぬ。

夜、オリオンのななめ左下方に、シリウスがはげしい光芒をはなっているのを、煙草を吸いながらひとり眺める。

一月十四日

觀兵式立附け。終つて面会。父母来る。列車は満員にて、大阪より立ち通しであつた。母は眼をくぼませていた。十二時から十四時までの、許された二時間はまたく間に過ぎた。なにを聞きな話を話したかも、ほとんど夢中である。自分は母が自分の水兵服姿に、なれば讚嘆の眼となれば憐憫の眼をむけるのをこそばゆく感じながら、「元氣です」「頑張っています」「つらいことはなんにもありません」と、そういうことばかりいつていたようであつた。文吉兄さんが、あたらしく編成された部隊に編入されて、此の八日に大阪港からどこかへ出て行つたという事を聞く。兄は伍長になつていたが、四時間ほど家へ寄ることを許されて、「これが今生のわかれかも知れへん」といつて、如何にも淋しそうな様子をしていた。装備は夏装備であつたから、太平洋のどこかの島であらうという。自分のことはさほどに思われないが、病身で氣の弱い、そうして三十四にもなつて応召になつた兄のことは心にかかる。母は愚痴をばそほそといひ、うちの家業は誰に継がせたらいいのかという。自分は、

「そんなこと、今相談を持ちかけられても、かんがえられるものか。」と叱りつけた。しかし自分も、F先生が、「呉々もからだに氣をつけて、自重するようにつたえて下さい。」といわれたということを開き、また父が、

「これから、許されれば、お前の行くところへ、どこへでも面会に行くよ。」といつてくれた時には、大分感傷的な氣持になつた。

面会所は海兵団門の右横。日がぼかぼかとあたるいい日和でよかつ

たが、食うことを一切禁じられたのが、如何にもうらめしかった。ぼた餅や寿司や赤飯のはいっていただけであらう大きな風呂敷づつみをまえて、あちらでもこちらでも、残念そうな光景が見られ、「お父さんとあたしとで、こうやって隠してあげるから、一寸食べたら？」などと、子供をかばうようにの対し、小声で、しかし軍隊口調で、

「駄目でありませう」と答える息子、それに涙ぐんでいる若いお母さんの姿なども見られた。親の気持というものは、実にありがたいものではあるが、少しこそばゆく、かつ、これからのわれわれにとつては、或る時は重荷となつて感ぜられるものかも知れない。

だが、藤倉という奴は、なんと要領のいい奴だらう。面会がおつた時、彼のゲートルはいやにふくらんで不恰好になつていた。そして巡検後、釣床のなかへ蜜柑二個秘密配給。自分は手をよこさずに、戦友の冒険で口腹をたのしませるのはうしろめたかつたが、ありがたく頂戴におよぶ。

一月十七日

海兵団長がかかる。海軍少将鎌井高章著任。帽を振つて前任を見送る。午後被服点検。釣床教練。非常につらい。

自分は一週間ばかりまゐる日記に、海軍軍人としての生活に徹することが、やがていのちあつて戦争がおつた日に、自分の学問への眼を深めてくれるであらうということを書いた。しかしそう考えることは、結局海軍での生活を自分のための経験、手段としてだけ強く考えることで、それは海軍軍人としての生活に徹するということと矛盾するばかりでなく、こんご、われわれのからだにも心にもあまるつらい試煉に、それでは充分に耐えてゆけないのではなにかと思う。だが、自分で自分の心を誤魔化さずじつと見つめてゆくと、自分はやはり生きて自分の本来の生活にかえることを頑固にねがっているようだ。

いつか雪の日、吉見教班長がカッターのなかでいった言葉は、自分を慄然とさせる。自分は自分の志した学問を深く愛した。よき友、よき先生、静かな研究室、美しい歌、それがたとい情緒的な面を多分にもっているにせよ、自分は懸命に学ぼうとし、自分の仕事に種蒔き水をほどこして来た。しかし自分はそこから未だにものをも刈り取つてはいないのだ。自分の一生の仕事と思つたものから、一粒の実も刈り取らずに、二十三年数カ月の生涯を閉じなくてはならないとしたら、自分はやはり耐えがたい気持がする。未練というべきであらうか。

一月二十五日

昨日武装競技、午後茶話会があり、おつて、予備学生合格者の発表があつた。自分は予期した通り、飛行科、土浦航空隊行きと決定した。一年前、自分が海軍の飛行機乗りにならうなどは、考えてもみなかったことであつた。

法科を出た米村、吉沢等が主計となつて東京築地の海軍経理学校に行くほか、鹿島は一般兵科に決定し、横須賀武山海兵団行き。土浦組が最後の出発となるため、われわれは鹿島の弁当つくりにいそがしい半日を送つた。竹の皮が小さく、ほかによい包み紙もなく、かれらのために心をこめてやりたく、苦心の作業をつづける。

横須賀行きの組は、本夜半一時四十分、釣床を畳んで、一斉に出発した。鹿島の歌のように、いつか大学の荒樫の木の下にふたたび集まる日があるか。われらの生死は明日を論ずることは出来ない。海軍のわかれば、手をにぎりあうこともなく、肩をたたきあうこともなく、ただ拳手の礼をして帽子を振るばかりである。思いは胸にせまるが、鹿島ともほとんど口をきく暇なく、二カ月まえまで、グラウンドでボールを蹴り歌をたどり哲学を論じた者たちが、一樣の紺の水兵服姿で、寒夜の練兵場の土をふみ鳴らして出てゆくのを、舎外にながながと見おくるだけであつた。おそらく此の者たちと再会の機はもはやな

いであろう。

鹿島は生来放浪性のゆたかな奴で、宮川町の茶屋の女将と懇意になつて下宿のように入りびたつていたり、講義も教練もはつたらかして、一カ月も青森県の温泉へ行つていたり、そして此の戦争に対しては、藤倉とともに、きわめて批判的乃至傍観的であつた。しかし、鹿島にのこされた道もただひとつ、勇敢に運命に耐えて、たたかひに臨むことだけであらう。自分はひとこと、乾柿の札に託してわかれをいいたかつたが、出発の時、ながい隊伍のなかには、暗くて彼の姿を見いだすことは出来なかつた。

藤倉と坂井とは自分とともに飛行科に決定し、土浦へ一緒に行くことになつた。横須賀組の出発したあとは、釣床の列が齒の抜けたようになつて、なにか不吉に見えた。午後、旅費を受け取り、旅行の注意を聞く。明朝はいよいよわれわれも出発である。

土浦海軍航空隊

二月二十日

日曜日であるが、外出はまだ当分ゆるされそうもない。朝礼後教育主任より訓話があり、予備学生の評判は中央においても各実施部隊に おいてもきわめてわるく、そのだらしのなき、忠誠心の不足が部内の非難のまとなり、猿に士官服を著せようなものだとまで言つてゐる向きもある、お前たちはいったい本気で海軍に御奉公をする決心が出来てゐるか、海軍の生活を一時の腰かけだとおもつておる者はないか、父母死すとも郷里にかえるところをおこすな、決戦下此の夏までにお前たちはみな死ね、うかうかした気持でいたら、帝国海軍の伝統に泥を塗るだけだぞ、こんご生死の間にあつて、お前たちが去就にまようときは、すみやかに死に就け云々と。夏までに死ぬ覚悟をさだめて置けといふのではなく、ただ死ねといふのだ。われわれはここで、何か事あるごとに、死ね死ねと教えられている。いったい、戦争

をやりとげることが目的なのか、自分たちを殺すことが目的なのか。ただ死んで祖国がすぐえるものなら、われわれは何としてでも死んでみせるであらう。二月一日十四期飛行科専修予備学生の命課式のあつた日から、自分たちは死というものにはつきり正対せねばならぬ氣持になり、貧しいながらそれについての覚悟をさだめよう、真剣にこの準備をはじめているつもりだ。しかし死ぬことと自分が目的だとは、いかにしてもおもえない。いたずらに死をいそぐことは、どんな面からかんがえても無意味である。右のごとき言いかたからすれば、空襲時に退避することも不忠のひとつになりはせぬか。藤倉ならずとも、教育主任の斯くのごとき言辞にはつよい反撥をかんじる。すべての学業をなげうたせ、猿をかりあつめて軍服を著せしたのは誰だ。

こゝ土浦の生活には、いったいに思いやりのある措置というものがまったく見られない。煙草は嚴重な制限をうけている。品物がなければなく、自分たちの生活がすこしでも快適になつてはならぬのだ。たまに吸うと頭がクラクラする。通信も週一回、葉書一枚をかぎつてゆるされる。しかも先週自分が武山海兵団の鹿島あてに出した葉書は、字が小さすぎると突きかえされて来た。抑指大の字で書けと。あらゆることは試験だとおもいたい。一枚の葉書をたからものように机上に置いて、今週は誰に出そうかとかんがえあぐむことにも馴れたし、そこに一種圧縮されたよろこびもないことはない。しかし、書きたいことが胸にあふれているのに、スタンプのごとき字で葉書を四行に書くことまでが、有意義な試験だとかんがえるほどのお人よしに、自分はなりたくない。

自分は藤倉に、この戦争には歴史的な大きな意味があるとおもう、すくなくともわれわれの日本は、いまあきらかに存亡の危機に立つてゐる、そのためには、われわれのあらゆる力を捧げたいとおもう、だが、自分たちのことを自由主義教育に蝕まれた猿だとおもつて、ヒステリックにおもいあがつてゐる職業軍人の手に、自分たちの生命を一つ束にしてゆだねることは、我慢がならないと話した。藤倉曰く。